

## 1. 特に効果的であり改善に資した事例について

### A. コースワークの充実・強化

#### ②分野横断的な科目群、副専攻科目群等の充実

##### ●早稲田大学文学研究科人文科学専攻アジア地域文化学コース

##### 「アジア研究と地域文化学」の事例

###### (具体的に何を実施したのか)

本学文学研究科の博士後期課程では3年間の研究指導(週1コマ)のみが設置されている現状を改善し、研究指導を①・②に二分し、①では21世紀COEプログラム「アジア地域文化エンハンシング研究センター」の成果による教育制度として2007年度に発足した「アジア地域文化学コース」の担当教員が全員で院生を指導する体制をそのまま継承するとともに、新たに②の「特論ゼミ」を新設して、①で目指した集団指導体制の理念をゼミ形式で展開した。具体的には、コース担当の5名の教員が各ゼミ主任となり、それぞれⅠ「地域からの発想」、Ⅱ「理論モデルの構築」、Ⅲ「信仰の形態」、Ⅳ「漢化の構造と諸民族」、Ⅴ「生産の基盤」のゼミを担当し、コースの教育・研究目的である「アジア地域文化学」を学横断的に実施した。

###### (実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

「特論ゼミ」の構成として、各「特論ゼミ」の主任1名、取組実施担当者数名、当該分野の最先端の研究を行っている外国人の招聘教員1名、助教1名を配置し、これらの者が共同で大学院生を指導する体制をつくり、また各「特論ゼミ」ごとに海外の提携大学と連携して、現地でフィールドワークを実施する体制を整えた。こうした重層的な共同指導体制を組織することで、それぞれの「特論ゼミ」の分野から各教員が一体となって院生を研究指導すること、かつアジアの地域文化を最前線において研究することのできる“現場に強い研究者”を育成すること等を目指した。

###### (どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

各「特論ゼミ」では、各ゼミ主任の指導下で、海外から招聘した外国人教員によるゼミが実施されたが、それによって現地の研究者による第一線の尖端的研究成果に直接ふれる機会が与えられた。また英語や中国語などによる授業はそのままの言語で行う場合、通訳も入れる場合も含めて、従来型の授業とはかなりやり方が異なるので、授業にあたっては十分な打ち合わせを行ったので、院生に新鮮な印象を与えることができた。それは同時に現地への留学のモチベーションを高めた。また若手研究者の助教を積極的にゼミに活用し、ゼミの運営に参加させた

ことは、彼らが将来大学教員になるための良いトレーニングになった。

## 1. 特に効果的であり改善に資した事例について

### C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策

#### ③教育効果・成果についての検証と教育プログラムを改善するシステムの構築

##### 《人社系》

#### ●早稲田大学文学研究科人文科学専攻アジア地域文化学コース

##### 「アジア研究と地域文化学」の事例

(具体的に何を実施したのか)

「共同指導体制」をより充実させて、指導教員と院生との関係を可視化し、双方向的なコミュニケーションを確保するために、指導内容とそれに対する院生の対応を形に残る形式で記録するシステムを開発した。すなわち専門業者の協力で Web サーバに「学生指導データベース」を構築し、教員と学生の双方が共通認識をもって課題に対応できるようにした。このデータベースシステムを「レビューカード (ReView card)」と呼び、定期的な研究指導の実施のたびに、指導教員がその指導内容を記録し、院生がそれを閲覧できるようにした。このシステムは USB メモリに入れて他大学へ提供し、共同の研究を求めた。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

「レビュー・カード」の評価項目は①「問題意識」・②「先行研究」・③「資料研究」・④「論証」・⑤「独創性」・⑥「プレゼンテーション」に六区分され、それぞれの評価は三段階に分けて表示される。一人の院生の発表に対して、五人の指導教員はそれぞれの専門の立場から指導を行い、発表終了後にその指導の記録と評価を入力し、院生は自分の PC でそれを閲覧し、質問や反論も行うことができる。このような研究指導の記録は蓄積されることにより、さまざまな形にデータの形を変えることができ、かつ繰り返し見ることにもできる。しかし院生は他の院生の記録を見ることができないようになっておっり、これに対して教員の方は自分が行った評価を他の教員の場合と比較することによって、自分の評価を相対的に検証することもできる。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

こうした指導の記録と蓄積は、教員にとってはその指導過程の自己評価となっ  
てはね返り、院生にとっては研究の進捗の自己点検となった。五人の指導教員はそれぞれ専門分野を異にしているので (日本美術史・日本史・考古学・中国思想  
宗教史・中国史)、専門的な個別分野からの評価だけでなく、学横断的に指導や評  
価が行われることで、院生はそれぞれの個々の分野では発想しえなかった視点に  
気付かされ、学際的な指導体制を築くことができた。